



## 遼東半島と先端部 中央に大連の都心 海は西が渤海湾、東が黄海。

中国の東北部は文字通り東北三省と呼ぶ。北から黒竜江省・吉林省そして遼寧省となる。大連市は遼寧省の南端、歴史上有名な遼東半島の先端近くにある港湾都市である。戦前の満州に暮らした人なら、船で中国大陸に渡る場合、その玄関口として利用した人が多いと思う。日本にも何かと縁のある都会である。

『大連賓館』は、戦前の日本統治時代からの建物で、初めは満鉄(南滿州鉄道)直営のヤマトホテルとして建てられた。大理石をふんだんに使ったゴージャスな建物だが、設備更新が遅れすでに一流の格付けではなく、ここを選んだことは結果的に宿泊費を抑えることにもなった。

## 大連と旅順を訪問

2004 年、日露戦争百周年の年に、初めてこの地に入った。8月22日(日)の晩、中国国際航空(CA)を利用して大連の周水子国際空港に降りたった。空港のビルから出てタクシーに乗ると雨が盛んに降っており、街の光がその路面に反射して光っていた。タクシーが向かったのは、市中心の東にある中山広場、その一角にあるその名も『大連賓館』を名乗る建物だった。ここに連泊する予約を入れていた。外観もそうだったが、通された部屋は分厚いカーテンや地味な壁紙が目立つクラシックな雰囲気だった。



## 大連の一中心、中山広場

その夜、ベッドに横たわって間もなく、傍らの電話が鳴った。出ると、女性のたどたどしい日本語での声。一体、誰だろう？しかし、直ぐ

にチェックインの際に、応対してくれたフロントの女性からだと言った。その李さんの提案は、滞在中に旅順に行くならお手伝いしますよというものだった。明後日なら暇が取れるので、車をよこしますからご案内しましょうと言う誘いで、こちらもそれに乗ることにした。旅順は大連の南西に隣接する日露戦争以来の軍港だ。この時もお、軍事施設として外国人の立ち入りを制限していた。行くならガイド付きが良いとガイドブックにも書いてあった。しかも公式のガイドなどいない状況だったから、この話に乗るのはそれなりの選択だった。

一夜明けて、階下の食堂に行こうとした時、同じ階に日本人の男性が泊っていることに気付いた。声をかけると、その初老の紳士は京都の龍谷大学に所属する教授のNさんと自己紹介した。ここに宿泊して半月近くになると言う。廊下のソファに坐ってしばし歓談。この時は、近くの旧満鉄の図書館に通い、自身の研究分野の資料を閲覧しているとのことだった。戦前の満鉄については、多くの経済史家が研究対象にしている。そうした研究者にとって資料を閲覧できる満鉄の図書館は貴重な存在なのだろう。



大連賓館の外観(2019年現在、閉館中)

N氏と中国との縁は、1973年の国交回復後初の交換留学生として、京都大学生だったN氏が北京大学に留学してから始まったと言う。大学の寮では、後に中国政府の要人となる学生とも交流があったそうだ。この時はまたの再会を望んだまま、お暇(いとま)した。朝食は1階奥の食堂でお腹の通りが良い各種のお粥を食

べ比べたりした。後で黄色い粥は高粱のそれだと聞いた。小籠包なども食したのを覚えている。

さて、この日は市内散策に充てた。主な観光スポットは、中山広場から徒歩の圏内にあった。まずこの広場が大連随一の観光地でもあった。中国の一漁村であったこの地に、豊かな商業港を開いたのは、百年以上前のロシアだった。1898年に清国から無理やり租借して、整然とした街路が交わる市街地を計画した。その中心に造られたのが、放射状に幹線道路が外へと伸びる中山広場だった。直径は200m近くにもなる、広大な円形広場だ。昨夜は、環状の道路に囲まれたこの広場で、婦人達が踊っているのを遠目にみることもできた。

この地をダリーニー(はるかな地の意)と呼んだロシアの支配は、7年とあまりにも短かった。1905年には、日露戦争の敗北で、この地は日本のものになった。だから、広大な円形広場に正面を向ける石造りの建物は、その殆どが日本の統治時代の建造物である。大連賓館の東隣は、1917年に竣工した大連市役所。戦後は大連市政府の庁舎となったが、現在は中国工商银行の支店となっている。そして賓館の広場を挟んで正面に対峙するのは、中国銀行の大連支店とされる建物で、かつては横浜正金銀行大連支店だったものだ。正金銀行は、その後の日本で東京銀行を経て三菱UFJにつながる外国為替に特化した銀行として営まれた。これら一つ一つが、西欧の公共建築を模した建物で、重厚さと壮麗さを漂わせていた。

その広場から上海路を北上すると、鉄道橋の勝利橋を渡り、ロシア人街として知られた団結街の通りが延びて行く。玉ねぎ型の屋根をいただいたロシア建築が沿道に幾つか見られる通りだった。歩いている人も土産屋の売り子も、大方中国人だったが、ロシアの民芸品マトリョーシカなどを売りにしていた。旧ロシア人街は金帆公寓と呼ぶロシア風の外観をもつ建物の所で円形広場を作って終わっていた。広場を囲

むその他の建物も外観からしてロシア式の洋風建築だが、何の用途にも使われず観光開発は途上という印象を受けた。

勝利橋まで戻って市電 203 路に乗車。突然戦前の大連にタイムスリップしたよう。それもその筈、木製の車両は戦前の日本統治時代からのもので、モーターの唸る推進音は、消えゆく直前に乗った 70 年代の京都市電を思い出させた。その他の地域ではスマートなトラムが走っているの、この路線は貴重な歴史遺産と言ったところだ。東方の人民路を通り過ぎた辺りで下車。市電 203 路とこの通りとは、新旧の対象が際立つ。人民路は、あたかもニューヨークの五番街かと思わせる近代的な超高層ビルが、沿道に並んでいる。大連一のフラマーホテルなども、この通りに立地する。その下のショッピング階にはグッチやルイ＝ヴィトンなどのブランド・ショップが軒を連ねていた。



スマートなトラムが走る街にクラシックな市電が

この人民路に代表される大連市の繁栄を築いた人々の中に、80 年代後半から党と市政に携わった薄熙来氏のような人物がいた。彼は初めに担当していた市の金州地区で、経済開発区内の外資誘致、特に日本企業の進出受け入れに功をなすと、90 年代には市長に転じ外国に開かれた国際港湾都市としての今を造り上げた。その後、遼寧省長、重慶市長として活躍したが、党の権力闘争に敗れ、収監される憂き目に会うことに

なる。一方、経済人としては王達(ワンダ)グループを造り上げた王健林氏の名が知られる。王達グループの本社は北京に移ったが、発祥の地として、グループが手掛け開発された高層住宅中心の不動産や王達広場のようなショッピングモールも、市内の各所に立地している。

人民路を中山広場とは反対の東へと歩く。東京の銀座通りのような、しっかりした石造りの歩道が、ゆったりとした幅で続いていた。摩天楼の林立を過ぎて中層の建物が目立って来た所で、折り返す。先の市電の通り(世紀街)まで戻り、南へと歩く。人民路のもう一つ南側の通り、魯迅路が見えて来た所で、その西方を見渡す。戦前からの古い石造りの建物が、横にウイングを広げていた。これが今朝の N 教授との話に出て来た、満鉄の本社だった建物だ。現在は遼寧省の鉄道を統括する瀋陽鉄路局の大連事務所として利用されている。そのため、中の見学は叶わなかったが、この日本統治時代のシンボルとも言える巨大な石造りの建物の外観だけでも十分な気がした。

そこから宿舎のある中山広場は、直ぐだった。魯迅路の両側は言わば官庁街だが、右手に人民解放軍(中国軍の呼称)の建物があり、その路面に売店を出していた。何と食料品を売っているのだ。この時代、国営の組織は独立採算を求められサイド・ビジネスに励んでいたが、軍隊までその事業をしなければと言う実例をみるのは、驚きだった。

宿舎に帰り、夜は港町ならある筈と、近くで海鮮料理の店を探した。入った店には、魚が泳ぐ大きな水槽もあり、聞くとこうした魚介類を自由に選んで、店側で焼いてもらう仕組みだった。ただし笑顔の女性店員とのやり取りは英語が通じず、香港人だという店長に出てきてもらって説明を受けるまでに時間がかかった。そして焼き立ての串刺しの大えびを、ほお張ることになった。

翌日は朝から旅順行きとなった。李さんはホ

テル脇に彼氏の車を横付けし、自らは後部座席に座って出発となった。旅順は南西に伸びる遼東半島のさらに先端にある。半島の南側の道を1時間近く走り、先ずは市街地の海沿いにある軍港公園を訪れた。当時は公式には外国人の立ち入りが制限されていた公園に入り、旅順港の中核と言うべき外洋との出入り口を眺めた。しかし、直ぐに公安(中国の警察を指す)の監視がきつくと連絡があり、そのまま次の203高地へと向かった。ここまでは良かったが、最後のスポット、水師営となると、素人ガイドの李さんもその場所を知らず、道行く人に何度も聞いて漸くたどり着いた。李さんが呼び掛ける言葉で、水がシュイと発音することに気づいた。

この件については、画文集『旅の空の下で』1の中国旅行のページに旅順行きのエッセイがあるので、そちらを参照していただきたい。

この日は、午後の早いうちに大連に戻ったので、南山と呼ばれる市の中心から南東側の閑静な住宅街を訪ねた。ここは戦前の日本人が開発した高級住宅街で、昭和の洋風建築がそのまま残る一角もあった。かつて成城学園にあった学者の「柳田国男邸」をご存知だろうか？屋根をドイツ瓦で葺かれ、カーキ色の砂壁に覆われたアール=デコ様式の建物だった。それをイメージする洋館が、数多く並んでいた。中でも東西に延びる風楓街には、その日本時代の家屋を模した現代住宅が左右に並び、高級分譲住宅となっていて、大連の新名所となっていた。

中山広場から出発し、今こういう場に身を置くと、一瞬「ここは中国か」と感じることもあった。また、戦前の日本が目指したのは当初、日本文化の定着というより欧米帝国主義に伍する西洋風の国造りではと、思わざるを得なかった。ここで李さんたちと別れ、人民路近くまで下り、喉が渴いたので見つけたホテルの喫茶室で紅茶をいただいた。日本人の男性と思われる人に近づき話しかけると、出張でこちらに来ているという。何でも、神戸でサンダル製造の

会社を経営していて、こちらにも工場を持っているとか。当時、大連の在留邦人は5000人以上で、その多くが日系企業と関係していた。そこにほぼ同数の日本からの出張族も来ていたと言う。この男性もそうした一人だった。

この時の旅は、戦前の満鉄のルートを辿って東北三省を列車で北上する旅だった。三日目の朝には、これも東京の上野駅を模したと言われる大連駅から特急に乗り、北方の遼寧省都(会)、瀋陽を目指し、街を後にした。

## 大連を再訪する

数年の時を経て、2012年8月18日(土)から9月1日(土)まで大連に滞在する機会があった。この2週間は、近くて遠い国である中国を理解するため、語学研修に訪れたものだ。研修の手配は、東京・東池袋のJTBでもらった。選んだのは外国語専門の学校という事で、市内にある大連外国語学院(現在の外国語大学)だった。2週間はあまりにも短いので、教室はマンツーマンの形式でお願いした。半月間、ほとんど中国語漬けの日々を送った。



都心の労働公園から Kempinsky ホテルを見上げる

大連外国語学院は、その創設が60年代にまで遡り、時の周恩来首相が東北地区の日本語教育の拠点として設置させたという経緯がある。戦前からの日本との縁もあり、開かれた港としての街の性格もあり、それにふさわしい地だったのだろう。さて着いた土曜の午後、空港から

タクシーに乗り向かったのはあの中山広場から南山方面に南へと入った外国語学院のキャンパス、その一角にある学院の賓館だった。中国の大学には、どうやらビジター専用の宿舎があるようで、大連外国語学院の場合も施設としては一般のホテルと変わらぬものが、留学生宿舎の一面に用意されていた。

さて、やって来たものの、中国語学習の初心者として学び始めるのは、心細いものがあった。まずは、他の日本からの留学生と情報交換。この時出会ったのは広島県尾道市の大学から派遣された学生達だった。彼らの情報から、都心へのバス発着所前に亜恵(アカシア)美食というカフェテリアがあり、おいしいと言う評判を聞いた。賓館地下の食堂で供される食事に早くも抵抗を感じていた私は、このカフェテリアに通うことが多かった。何より、冷めた学食の食事よりこちらの温かい食事に有り難さを感じた。

月曜日がやって来て金曜まで、午前中をフルに使った授業が始まった。老師(先生)は王燕女史で、簡単な自己紹介によれば、北の黒竜江省ハルビン市の生まれで、大連の遼寧師範大学を出てこの道、即ち外国人向けの中国語教育を担うことになったそうだ。三十過ぎの独身女性で他とは比較できないが、とてもおしゃれな女性だった。授業内容がわからぬ時、老師とのコミュニケーションは授業中もその後も、英語で行うことができた。そもそも使用していた教科書が北京の語言大学出版のもので、テキストと並行して英語の説明が添えられてあった。

授業は午前中いっぱい終わるが、我ながら日々真剣に取り組んだと思う。午後に息抜きの市内散策をいれるものの、夕食をはさんで5時間位は予習・復習に充てたと思う。しかし2週間では限界があり、テレビは殆ど中央電視台の9chを見ていた。英語による国際放送だった。キャンパスは大連屈指の繁華街、青泥橋街にも近かったので、このモダンなショッピングエリアにも足を運んで、夕飯を取ることもあった。

見つけたのは『百年城』という専門店街に入っていた福井県のラーメン専門店『8番らーめん』(現在は無い)で日本の味と変わらぬ醤油ラーメンに舌鼓を打った。店員は日本人と見ると、日本語で話しかけてくる。聞くと外国語学院の卒業生だと言う。大連にはこうした親日家が多いという感じを持った。この年の夏、上海では日本の総領事館が暴徒にペットボトルを投げられ、内陸の街でイオンの店舗が襲撃されるという事件が起こっていた。日中両国の友好とシンパシーが急速に失われた時だったが、大連では何も起こらず「無風」と言ってよい程だった。



外語学院近くの延安路 アカシアの並木が続く

老師のワイン好きの話の聞いたり、大連駅から快軌(郊外電車)で二駅の「香炉礁」の駅前にすでにIKEAが進出していたことなど、21世紀を迎え市民社会の様相を示す中国の姿に時の流れを感じてもいた。休日に訪れた老虎灘という海辺の水族館にも、多くの家族連れが来て余暇を楽しんでいた。

半月の研修はあっという間に終わり、こうして二度目の大連行は、この街への愛着を残したまま終わった。四千年の中国文明を語るには大連の歴史はあまりに若い。しかし、日本との関係で言えば、これほど深いそして親密な交流をして来た街は他にはない。こうした経緯から、退職後改めて本格的に中国語を学ぼうとした時、大連行きを決めたのは自然なことだった。2019年2月、半年間の留学生生活を開始した。 <了>

